

## 奈良県産業振興総合センターにおける 動詞のデザイン「奈良ブランド開発支援事業」

奈良県産業振興総合センター 創業・経営支援部 稲葉水穂

### ◇ 官民協働の取組み

「奈良ブランド開発支援事業」は、官民協働の取組みということが共感を呼び、評価をいただいています。社会の課題解決に、“協働”が求められている時代に、行政も民間事業者もそれぞれの役割を果たすため協働で長年進めてきています。

奈良県庁（行政）が、製造業の方々を対象とした自社ブランディングのプラットフォームをつくり、事業者の方々がそこで学び、理解を深め、想いを整理し、実践の場の舞台に立ち、評価を仰ぐ。このプラットフォームに集うのは、多業種、多地域からの後継者、若き経営者の方々です。業種や地域は違えども、それぞれの課題はよく似ていて、各自、切磋琢磨を続けています。参加者が集う学びの場であるブラッシュアップ・ミーティングは、夜の3時間、毎月1回。学び、自身を見つめ直し、思考し、チャレンジする繰り返しです。共通の方向性は、社会性を持ち、ロングセラーを目指すものづくり。ブランディングという概念を真に理解することはなかなか難しく、繰り返し、繰り返し、学び、実践をしています。15年目となった県の事業ですが、「継続は力なり」という言葉があるように、継続することで官も民も成長していくことを実感します。

グッドデザイン賞連続受賞の評価を得、また、様々な応援をいただき、現在、銀座の百貨店「松屋」の7階に常設店「N・A・R・A T・E・I・B・A・N」開設という新たなステージにいます。行政の役割はこのプラットフォームの質を高め続けていくこと。新たな事業者の方々の参加を促し、高いステージでの評価を得、力をつけていく学び舎を目指しています。

### ◇ 動詞のデザイン

グッドデザイン賞の受賞が、松屋銀座での展開につながっています。松屋銀座とグッドデザイン賞との関係は深く、グッドデザイン賞そのものは約60年前、当時の通産省のもとでデザイン後進国といわれてきたわが国の状況に対してデザインの啓蒙運動として始められましたが、すでに松屋銀座と日本デザインコミッティーが行っていた「デザイン運動」が母体となっていました。

2012年になると、グッドデザイン賞の審査委員長の深沢直人氏は以下のようなメッセージを發しました。「デザインがモノ単体のカッコ良さとか機能性だけではなくて、そこに至るプロセスや活動、社会に向き合う姿勢なども含めてモノの背景にある見えない物事までもデザインとして評価するという視点の浸透を図って来ました。デザインは単に表面を飾り立てることによって美しくみせる行為と解されるような社会的理解でしたが、デザインという言葉の本来の意味である『問題を解決するために思考・概念の組み立てを行い、それを様々な方法で解決する』という原点に立ち戻ろうとする動きです。これからの時代は、目標を経済的発展やモノの豊かさに終始するのではなく、その先にある精神的なもの、心の豊かさに目を向ける必要があります。本来、『経済』は社会の裏側に過ぎなかったのに、今は社会が経済の裏側のように扱われていますが、主は社会であり、それは人と人、人と自然との営みであり、そこに人間としての存在理由があり、それは他者や自然の中での自らの存在感を見出すことが私たちのテーマとなるはずで。これからの社会は精神的豊かさを醸成し、人間同士が信頼関係をいかに構築し